



松久柳巷話説卷之三



通門 879 卷 3

東都 曲亭主人 編次

明治三十二年 七月十日 購末

野崎浪速津小古主に逢ふ
鳥屋屋七郎二ハ宛石宗達を伊勢へ久し七後又七日の早湯治
するに醫の瘡も愈へく彼地とて故郷へ皈るに城中の士平ハ
らるの妻子もる宛魂とらん疑ひとてさうぐくものもゆりて七
郎二も又その形勢を不審とまがりかう人を説明して恙るたうと
すは七郎二が妻或ハ驚き或ハ泣びあつても物ごとこれ七郎
二とくうく宗達が枉死を憐れ直ふ出仕して忍存に締の本志を告
るに忍存本志驚き怪とあつるとは宗達ハ罪多し汝亦彼地に在

松久柳巷話説卷之三

用尽してはくもすべしけき辛し伊賀と名のび出でく
浪速津まで来たなり。その日ハ膝さらふ飢へく己とをひきど
猫向川の西なる商人の家ふ立ちよりと食を乞ふやとあひまらるる
み掛ける暖簾とをば花田の荒布と白く染ぬきて漆器種々
の碗屋久右衛門と字ししりさてその暖簾を押し明てすま入り
とこハ盤纏さうさひく飢ふ迫りし旅人ありあられ一碗の飯を
於しあひねと面を死声して音るる店の主管とあがりし三年の
齢四十五六なる男の面を赤く頬髪のゆるげあつた。やうやくふ
えりりてあらしむる。汝が飢へるに。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
の夫にうらわれ獨行の路銀さうさひりる。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

あつた。誰りそまを実言と破べき。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

を野崎ハコウと云く。おくまうらる一室に誘ひて上座小居らし。
いと不審き氣をよせ。うら窶くくまひてこの渡りもて呻
吟まのハ定ゆくうき故あづー家公ハ恙なくや在する。こが子
八太郎とまでて俱しあはる。いと公のまうらりつふ。又之助ハ父宗達
が横先のうらうらうら。おま久しく伊賀の山里小縣居て近曾の津へ
来つて。又八太郎ハ阿坂中くや討まなん。今に音耗もあらず。そ
一五十と物ぐまハ野崎ハ彼毎小世の中の形る死とうら歎き
涙さーぐまつりや。やー出るも面くはまど推君が十二の年
の暮に。弘江久小平小伴は阿坂の山のおささるに主君の恩も省ま
せ。子と捨て跡を留し。彼此を漂泊して遂ふらの地小足をせぬ。

久平ハ目くに街とぬびあまきて碗折敷のふりころを置あつる。塗
後ハとを嚙南うら。久平ハ又人のあふ帆を刺網と編夫婦ゆら。挿し
世とつらふ小中活業の便宜とゆてうく廣かり小店と修理夫ハ舊の
名とまぐり。船江久平の久の字とくまどりて碗屋久右エ門と改名
し。夫婦安らう小年月を送る。おとと思ふも推君のあまのハ
太郎がうらひおまがる間ハ。あつる小久右エ門ハ近曾あまりて
家と嗣するものもあつた。豫と夫の遺言ハ一旦人命を懸る
小商人とらりて不意發跡。まど忠美ハ缺くる吾侪も。人
の子まどを養ひく。長く家名を遺すべうら。うら死して後ハ
ともくもて。内角が一生をむり。人と改えし。種小人勸まど。



有馬の温湯小
碗久親子
常花と

あはまむ



直六どのへのハ常花が養父服部團平之件の悪棍往來志井と
 班つと登七と台六と殺して伊勢の国を逐電せしより諸國を流浪し
 四年以前浪速へ来りし小野修が夫久右エ門ハ疔病するに由りて
 商賈の所にさうえしものを買と店を守らんとてありは
 其人を求めたる所ある人團平が算筆小長とてさうえしもの
 者ありてとて嫌するを以て團平ハ碗屋の小厮とありてその
 名を直六と名を假に老實するをもちしりてゆく程もさう店の
 主管とありぬあるに今茲主人久右エ門がまうりて嗣子も
 ろりしつと直六ハこの家と相續せんものこととありてさうと
 て養子の談合るごある者ありても竊ふとまじと阻む野修

あはせさせず。いづく信くしげの仕へるふ入りたるらちがも又之助
 が家を継とんくうく猖既ハ不良の念を費すをいんどもえ本
 類ひるた悪棍のまじその憤を氣にゆらハさず。又之助を敬
 て他責なくぞ傳きさる。

奇耦を感とて碗久松山の感弱す

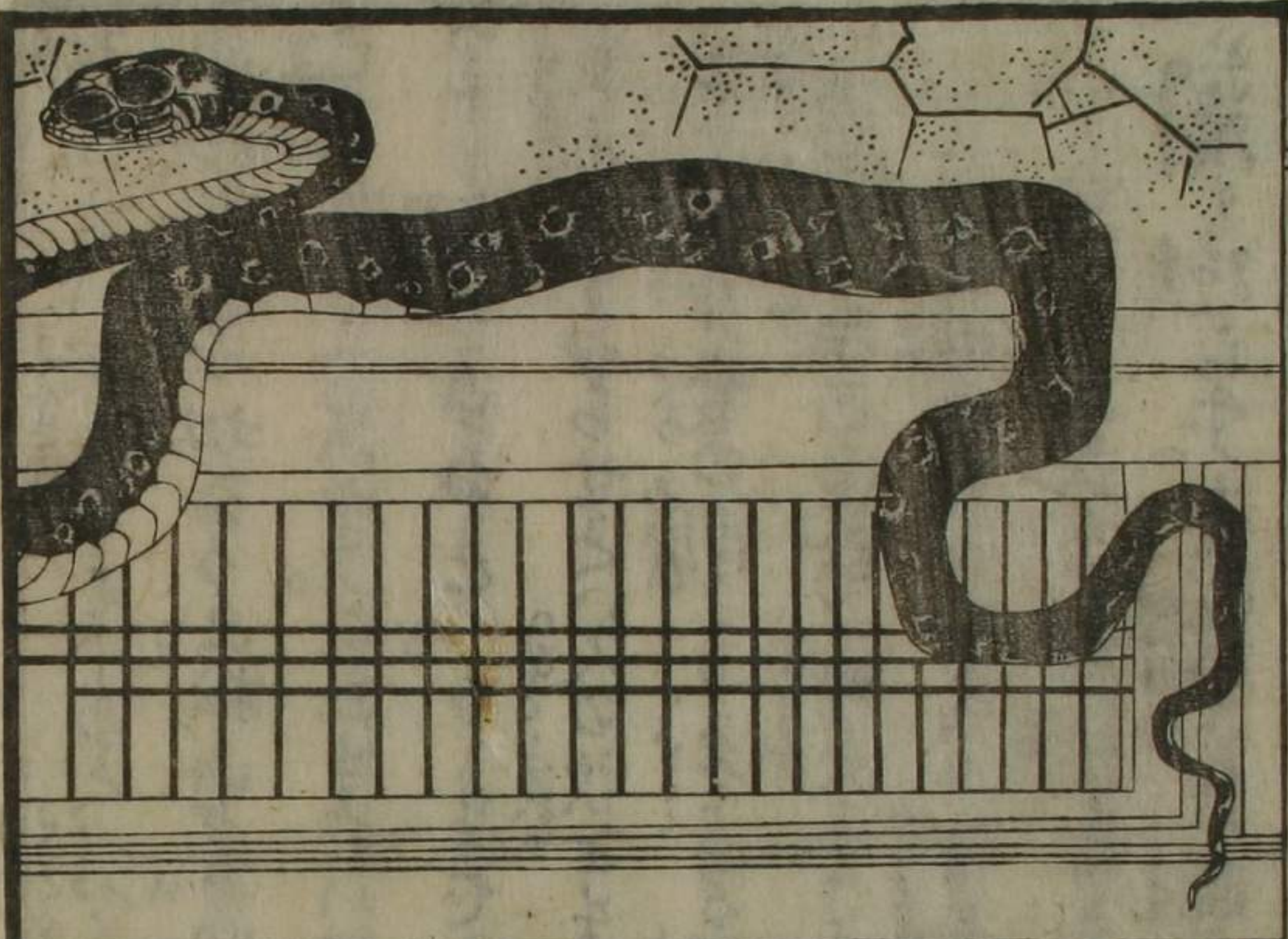
さる程小野修ハ日ととて又之助を碗屋久右エ門と改名して前の
 久右エ門が名蹟しつととて近隣の商人地方の里正小技ありしつ
 其西三日ハ是の酒醺彼の饗食夜多といとゆたかりてありさる。
 夕の星又之助ハつらく思ふ母物の前象あるすて因景の
 道理ハ遮しつと姓ハ宛石氏とく乳名ハ又之助あり。あるふ宛

石を合すまづ碗の字とるり。又の字の二ツの爪を除去して片假名の
 ノの字と添まづ久とるり。又の字の又とるり。西刀と兼く商人とる
 つと碗屋久右衛門と名乗る。祥なり。寔は禍福得失ハ人力の及ぶ所
 あらずと同悟。是より志をおとて商人とるるを厭ひ。又空ハハ
 のいふもまづ久の久右衛門ハ恥辱をそらしく。人ハ面を向ひざるや
 けしてよろづおのづ随ふせと尋思する。おとく富家の子身を勸
 て彼人を抑甚し。誘引し。花女たるをとりおとく。面目を失ハ
 せらば。忽地人もちりて風波せし。あるは彼らハ乳臭き小児
 とも誰り阻む。のめとま。あつらりくとひより。点謀既所定の
 とも誰り阻む。のめとま。あつらりくとひより。点謀既所定の

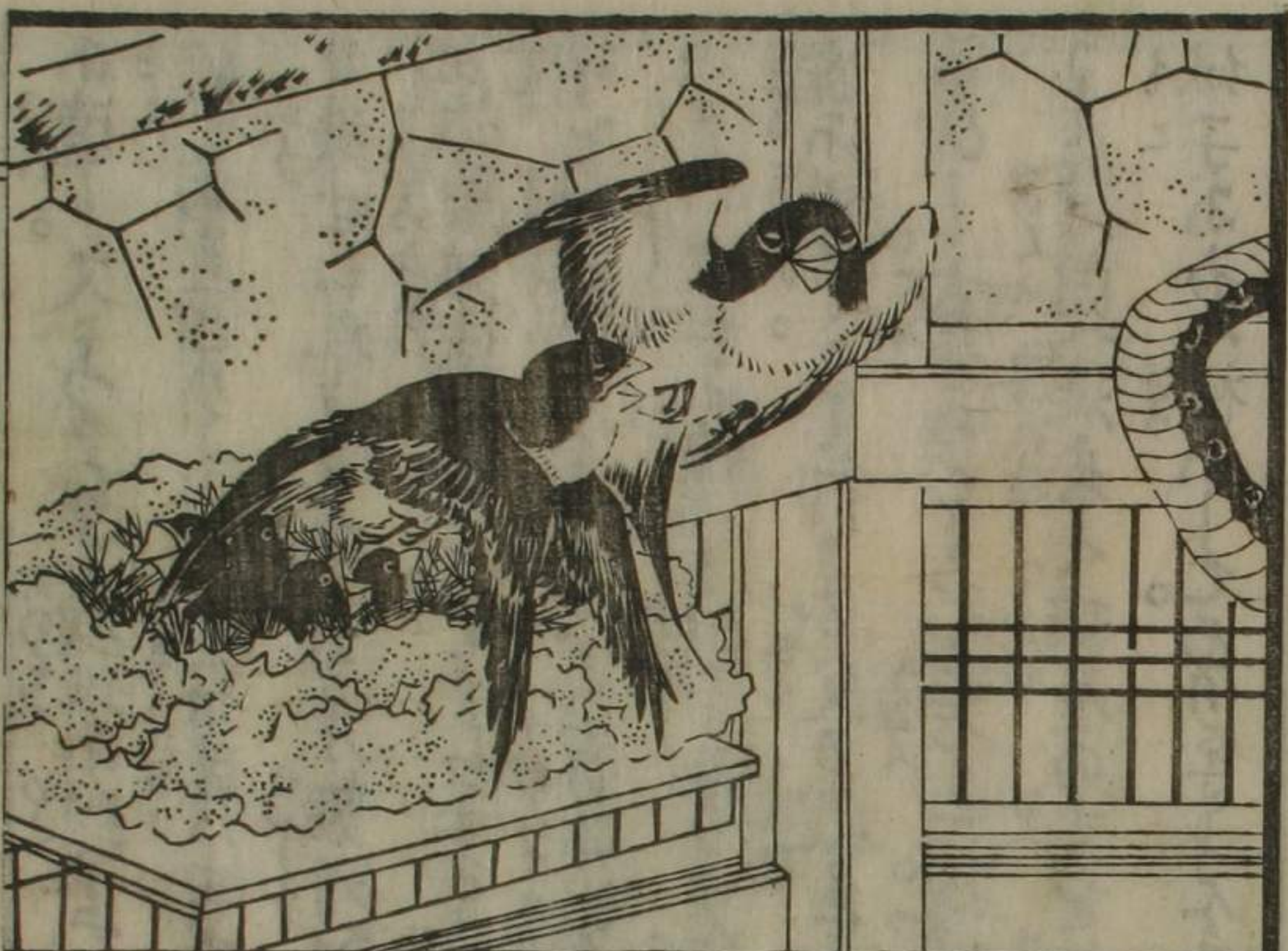
いびどろ抄判大江坂大坂浄國寺のわらわに一擧ありて。妓院の
 なるらぶ。まづ四方の嫖客とふらふ。ひてめづら。遊仙の訣會
 なるせり。そが中の新屋とせえ。る妓院のあつら。老女ゆて法
 名を清春尼と稱る。ら。い。髪を剃らず。彼清春尼十二
 三年已前。あとの地。住。いと貪。る。羊
 の終。雜煮の餅。え。粥。ね。蒸。を。切。と。餅。の。こ。を。
 餅。小。換。く。朝。節。と。祝。の。こ。正月。二。日。の。又。こ。不。意。う。が
 門。切。あ。で。錢。一。貫。を。捨。ひ。こ。り。次。弟。に。富。く。送。小。妓。樓。と。開。き
 遊。女。懸。あ。り。ら。り。さ。る。あ。よ。う。て。清。春。尼。ハ。發。跡。と。後。も。蒸。と。雜
 煮。の。餅。小。換。く。喜。例。と。あ。り。こ。り。小。世。の。人。彼。尼。と。緋。号。して

まうと年^{とし}老女^{らうにょ}の力^{ちから}中^{なかつ}柳巷^{りゅうきやう}をどた米^{こめ}のい。この中^{なかつ}えおひ
 かりと痛^{いた}きくもどく^{もどく}の^の。もつらふもあつべけさ
 安堵^{あんどう}ておひしませと應^{おこ}するに野^の崎^{さき}のあつて^{あつて}たびと^{たびと}たしげ
 ぬぬりたり。さる^{さる}に若^わ人^{にん}のあつて六^む六^む勸^{すす}めらる^{らる}て^て縁^{ゆかり}この夜^よと
 笑^{わら}つてうら^{うら}まの^{まの}さつと^{さつと}、碗^{わん}屋^やの店^{みせ}に到^{いた}りて^て酒^{さけ}も^もたえ
 やうう^{うう}宵^よの月^{つき}も^も朧^{おぼろ}る^るに路^{みち}の柳^{りゅう}を^を挿^さげ^げして^{して}酒^{さけ}も^もたえ
 ちもの^{ちもの}り^り誘^よめ^めといひ^い。え^え方^{かた}ら^らの^の頃^{とき}ゆ^ゆも^も應^{おこ}さ^さま^まが^が母^{はは}の^の由^{よし}
 を^をや^やえ^えて^て野^の崎^{さき}の^のう^うと^と吉^{きち}に^にま^まの^の野^の崎^{さき}微^ひ笑^{わら}ひ^ひす^す。初^{はつ}
 むく^{むく}在^ある^る人^{にん}と^と親^{おんなじ}しく^{しく}交^{まじ}り^りす^す。便^{べん}に^にも^もあ^ある^る。
 今^{いま}宵^よ一^{ひと}夜^よの^の苦^{くる}し^しう^うの^のま^まど^どと^と行^いく^く。と^とあ^ある^る。初^{はつ}
 俄^{はつ}頃^{とき}の^の

衣^きの^の垢^{あか}つ^つた^たる^るを^を脱^ぬぎ^ぎて^てえ^える^るど^ど。髪^{かみ}の^の後^{あと}毛^けう^うに^に折^おつ^つて^て誘^より^りれ
 て^て立^た出^だす^す。う^うく^くて^て若^わ人^{にん}の^のあ^あつ^つて^て六^む六^むが^が示^しす^す。あ^あつ^つて^てう^うく^く。こ
 の^{この}頃^{とき}の^の揚^{あげ}屋^やの^のあ^あつ^つて^ての^のも^もる^るけ^けさ^さに^に碗^{わん}を^を引^ひき^きて^て並^{なら}ぶ^ぶ。蒸^むす^すか
 樓^{ろう}上^{じやう}の^の到^{いた}る^る。彼^か人^{にん}の^のあ^あつ^つて^て名^なを^を告^つげ^げて^て松^{しょう}山^{さん}を^を呼^よび^びし^しる^るに^に松^{しょう}山^{さん}の^の常^{じやう}
 にも^{にも}あ^あつ^つて^てその^{その}席^{せき}に^にあ^あつ^つて^て久^{ひさ}し^しく^く熟^{じやく}する^る。あ^あつ^つて^てう^うく^く。つ^つて^て久^{ひさ}し^しく^く
 加^かまり^りら^らく^くけ^けり^りて^て碗^{わん}を^を久^{ひさ}し^しく^く。ま^まど^どと^とう^うく^く。あ^あつ^つて^てう^うく^く。あ^あつ^つて^てう^うく^く。あ^あつ^つて^てう^うく^く。
 連^{れん}ね^ねま^まつ^つて^てを^を知^しる^る。ま^まど^どと^とあ^あつ^つて^てう^うく^く。あ^あつ^つて^てう^うく^く。あ^あつ^つて^てう^うく^く。あ^あつ^つて^てう^うく^く。
 恨^{うら}み^みあ^あつ^つて^て碗^{わん}を^を久^{ひさ}し^しく^く。不^ふ審^{しん}な^なら^らあ^あつ^つて^てう^うく^く。あ^あつ^つて^てう^うく^く。あ^あつ^つて^てう^うく^く。あ^あつ^つて^てう^うく^く。
 ま^まど^どと^とあ^あつ^つて^てう^うく^く。あ^あつ^つて^てう^うく^く。あ^あつ^つて^てう^うく^く。あ^あつ^つて^てう^うく^く。あ^あつ^つて^てう^うく^く。
 怪^{あや}し^し松^{しょう}山^{さん}の^の君^{きみ}の^の碗^{わん}を^を久^{ひさ}し^しく^く。何^{なに}の^の故^{ゆゑ}に^に遠^{とほ}く^く。初^{はつ}と^とう^うく^く。ま^まど^どと^とあ^あつ^つて^てう^うく^く。



さて八重乃ハ有馬の小湯女常花
 とやらんゆゑありたる今ハ野の
 羊と経て面立させし純まうさ
 よとく奇しき再會之とゆふ
 松山ハ目と押拭ひてえ未由乃と
 さらハとハ岩間の温泉に散じ
 花の浮くる姿させしゆもゆら
 親の許させむひくる後の信を
 まろくひるく妬湯の祟とて越
 の三国へ賣くえら且又洛へとて



送りて今ハ浪速ふるがらつる
 川竹の瀬小羊ハ経まごも此君
 ゆ多由乃と汚さず千辛万苦ハ
 言の多あふ尽ぬ縁のあまじや
 甲夜より面とあハるがらそれ
 うすありあはざるいゝありげ
 ろくゆりそく恨を涙あはすれば
 碗久ハ只顧し感涙をどぐあね
 さていねる夏父宗達が往ゆひ
 つる事を違はとて八太郎と有馬

小遣つづ。又またも彼地あつちに到いたつて常花とこよみが往方ゆくへとあらんをせしふ。
 終つひてあまざりしもの。又宗達そうたつハ何なにの故ゆゑもあらねど有馬ありまより久。
 日ひ殊ことせられしもの。こが勢せい列れつと脱だつ出して伊賀いがの山里やまにお隠かく居ゐる。
 近ちか曾そ浪なみ速はやにまたたらずも乳母めのと野の崎さきが夫とと碗屋おんや久ひさ右みぎ門かどが名な。
 蹟あとと相あ續つせしもの。すべし審つま小説がらをしし。さていひやう寔まことふこれと。
 内うち弟あにハ過あや世よにひ締ひづる縁えんしりり往ゆけり父ちちこれを許ゆるし今いま又また養母やしほ。
 密ひそ小こ導みちくさまじり父ちちの戲あそままら。婚よめ縁えんのちりしとてあへ。
 あり古ふる哥かのころと考かんがへ津つの國くにのひとのちくる有馬山ありまやまとハ。
 こと津つ國くにへ流ながれ来きて碗屋おんやの家いへと相あ續つし有馬山ありまやまとちぎぎ。
 妹いも子こふああ祥さかふしとありともんえず雲うもぞもる門かどとある下したのうハ。

是こゝが往方ゆくへのあまざりしを雲うもくくはゆし山やま小こ喻たとへ又また一首ひとハちぎぎの
 生なる互あふ袖そでとあまのつ。まハ松山まつやまとなまなぬる。は月つきままとまままのころ
 瀬せ多く浪なみも越こへ契ちぎし初はじる今いま宵よの相あ語かたといふふ似にたり。ひああず
 去さるる古ふるのああももええ残のこみみわわららずずといひひし松山まつやまハあ恨うらみみをまれて。
 假かり初はじめめららぬ契ちぎをた嬉うれしし通と宵よ来きしし行ゆく志しの物ものがさりしてままま。
 是こゝ妻つまと結むすぶるるべししくくて碗おんハあ飽あぬぬ後のち朝あ小こ起お起きししてその後のち。
 言ことの序ついでに松山まつやまが縁えん故ゆゑ父ちちの許ゆるせし妻つまあるるししを野の崎さきにままま。
 すと野の崎さきはままま其その奇あま耦ぐをた嘆なげ賞あやしし今いまとて世よのまままをままま。
 久ひさ後のち松山まつやまのあまま季きづづいいたたるるばらららずず妻つまああハハ進まららせて。
 る父ちち上かみの宿志しゆくしと果はたたまますすままるるべししおおふふハハままのまままのままま通とひひて。

急ぎあつてうとよの碗久いもの程と云はくも通ひね只一條
 の美理ありつらひて後の難美を省さるが若人の習俗をまは
 果し人目もまぐららず只管と松山が許ふくひくが蒸湯と
 いたた花主ありとて疑待尋常なるてまは郷の老弱碗久花
 主と稱つゝその名をあらざるものなり又直六の曩に謀を存後て
 大の焦燥とてび奸計をめぐらさんとあつた碗久ハ松山を
 溺して家小あつるの稀るまはハ上死便宜と云ふるそ金錢を
 おのが隨小遣すて是とも碗久ハ假托多かりく野彦と護
 言して彼人を追出しめいふこの家ゆく程もあつた他人の住
 家とるべしとよの碗久のこの故めれば似これと野彦ハよくも

彼ら何事久右エ門が思ひまゐりて置がとりの直六ハせん
 ずんば小猛の野彦ハ淫くけき氣多とて己を多様とめて彼老
 女とそつて碗久を追出させんとするりてを彼も五十にちく
 日まも五十に近きまはゆてかゝる誑つた無多る生世彦ハこれ
 より直六をひよくらぬものも曉得く何事も後合せと直六ハま
 氣多とてんそつてが者まづ追出さるるを詰まひて密小足老と
 けんか死つ折よくハこの家を負てて遠く奔らしと計較ぬ寔は
 憎ても憎べ死ハこの直六の團平の
 長堀橋碗久偷難を脱る
 碗久ハ武士の家小生着する小猛ハ商人とるりてどりたまは

亡父の志を果しむる速は乃の暇をとりて。こまに又黒空の夜に
 容とろえ亡父母の菩提を吊べし人の誠を憐れぬ神も仏も
 ましませば後め父の罪をたよりも聞え主君大宮どのの後悔
 ちのふ時ありん。あつせんぬの思ひ定めてしぬ。松山いそめあり
 こまらして他へ客ふ逢わば。こまら遠くまりゆけはあやの老
 鶴が町責の咎ふお懲さるるが痛ましく。まがにひらくるりて
 うひの数の数もろこまのぬ。この故ふ小斯ホもあひ悔られ家業
 又衰ゆるまもこのまの過るりと省まば夢の覚ゆるがごん
 久より松山がまはるるに思ひほくことと人との野修めてい
 うら泣さ宜めは傍りあるべし。彼君のると思ひしえぬとまらうふ

ゆらぎ野修親子いらぬまららり。世を遊りて久右エ門も宛石の光
 家ゆの譜代恩顧ののるるに家の掟も人めの関も諭てりま
 と密會不弔發覺と奔るるまらば二人が首ハ喪るるも恨まら
 ちるるるぬふ。月日いろるるる人と照らしてぬひくとぬまありて人
 るるに世と渡ると今又とららるる守育る推子のころ家に来ませ
 してと罪を賺ふとよふるる。まらば推子ゆゑの貪くるり果ハを
 思とるるるるるる悔しとあひはらん。あつたぬ世の人の縁故を
 ちるるまらば。は乃ひとりとのゆへさるる。ひるるも腹くまらるる
 ぬらぬ小斯ホがうらも揃ひと不弔とまら。まらば遠電ひまらるる
 身に頼み昔がころひひ出るる面をせ。そのまられくるもぬれまら

三木山老

二十五

の入りのりやとゆふ東より上りて一旅客の財あることなるが一度
 松山ぎのどんくも持まふひ立地小身價して故郷のねく田ん
 じりしとどこの故より持続と物を買ひけき氣をさるにさどて野
 邊に八箇一のむと万代まむらららと契つる入る姫松と入ぬ
 根引さしあつて草の原ゆく父上もさどる本意多くあがすらぬ
 産業いぬ衰へまど直六つもあせざる一畧の金とありこれ
 ほどいふ不足らざるぐんまどまづこの金と燕婆とをせらるる遊子
 多く彼客を堰とある人縦家藏と活却しても人の花火のさめさ
 せど事後まてはそのうひま。そくとのそぐて敗布のまぐぬ
 ぞり出その金とよめは碗とまど受おつてりやう昔のま

のま今この家を続はぬが母あり。あつるをあのどくするともま活
 業さ衰ゆくにりてこの金とめて。松山が男と賺へたれとバ
 秘めたく老と養入料もあへりつとごとく彼女子が身價せん
 どの客あるまはしとら言らねど結び果ぬ縁をらば入力の及
 べぬあらしとを回答て受る氣をさるり。く野邊うさわてりま
 ゆるく宜の親族のうふあらしと親のどらに恃らぬを孝行
 せのりある金銭は一旦失へき又得ぬと。夫婦の縁ゆ一ト
 度竭て更ふ締が難うる。そは力にりすゆあらしとま
 亡父上の高息を復しなるにこそあは美理がましく推辞のふ
 八その親も却て薄し切きより守育する推子も覚悟する



と思ふも常より八足もすみて長堀と過る折も誰ぞを知らず
 拭ひてふく頬うづつと一り大男跡より跟來りかん橋とこと
 らんとするまはれ衝と走りくつと挑灯と歩落せば碗久さら駭
 きてこまはとふる向真額と握堅め一巻めて碎るむろ礫と
 歩ひるむとを飛くつと懐小多とさ一入は財布とすま
 と挫脛て奪ひ去らんとあさりくハ碗久ハ臥つても奴は推つて
 舟を起し遠きと引のり舟の紐を断まて二歩三歩ぬり
 後方によろめまつく又走るを癖者が突出す臂小膳を以て
 くおせま忽地小挫と船をとんぐりもせむと堀小深ひ橋を過
 つと鷹直小逃んま時小編笠あつくあくる武士嚮より橋の捆

干に刃を倚てらぬ体を窺ひ居てうが目今癖者が弱人とあ
 たり七金と奪ひ去るとして行死く小立塞と癖者ハゆめま
 せず袂の下と潜ゆく襟上とろく引ゆぞすとあり拂ひつとあ
 くるその身を背へ擦揚と軽く金をとり復せばその隙小碗久ハ
 中氣を落めと起くる砂小塗ま一膝の上へ投する件の財布
 目物もがら押載き思ひもけぬ情の助太刀とも何人あてお
 するどと問せも果す声と低し仔細のま名告るふ及びごとく
 音すととくくどゆゆらぬ當坐の礼謝あつらばよれまどむら
 つ小月ま曇る甲夜の雨も憂長堀の禍と濡る裳と引揚て
 夏を好まぬ潜び路のちのづあまる鮎道横ざりて走去まバ遣

